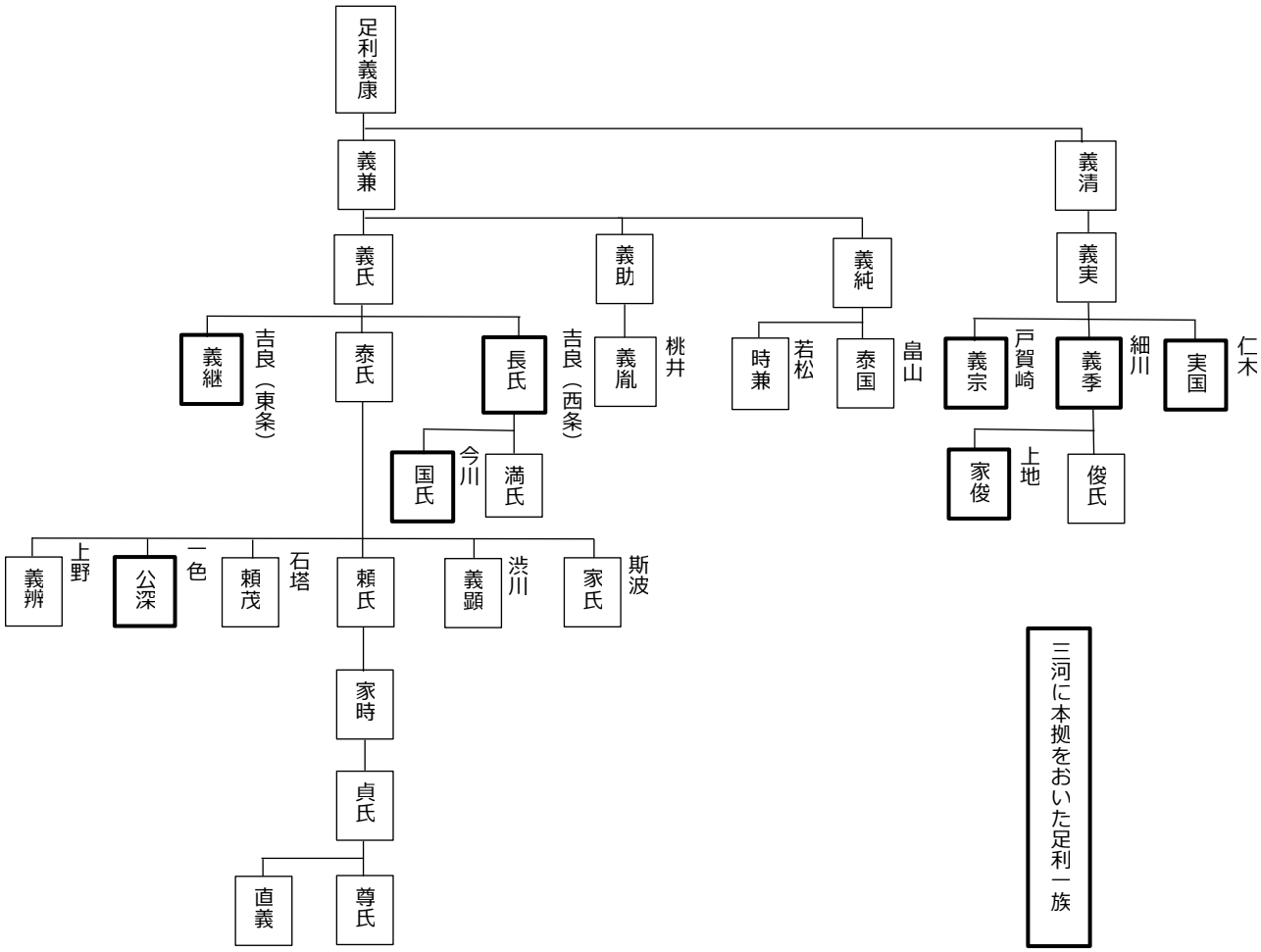
足利氏・高氏と総持尼寺

中村　正

昭和２年まで西岸寺の東隣には文和４年（1355 年）に創建された総持尼寺がありました。
南康生に今はなき総持尼寺とはどんな寺だったのか、時空を越えて訪ねてみたいと思います。

１．　足利氏と西三河

足利氏　系図



承久の変（1221 年）の恩賞として足利義氏が三河国の守護に就任し矢作に守護所を構え義氏以降の足利家当主（泰氏、頼氏、家時、貞氏、尊氏）も三河守護となり、その後高氏、仁木氏、一色氏、細川氏等が三河守護を務めました。三河は朝廷（京都）と幕府（鎌倉）の間にある要衝の地であることから足利一族の重要拠点となりました。岡崎市内には足利義氏が建立した滝山寺本堂、義満が建立した天恩寺があります。

室町幕府の将軍補佐役である三管領、細川、畠山、斯波の三氏も足利氏の出身であり、地名由来である岡崎市の細川、仁木、西尾市の吉良、一色、今川の各氏も出自は足利氏です。

２．　矢作川合戦と高氏

矢作川合戦の原因は建武２年（1335 年）７月に鎌倉幕府の再興をはかろうとした北条時行が大軍を率いて鎌倉を襲い、尊氏の弟直義（ただよし）を襲う大事件（中先代の乱）が発生し、直義が鎌倉脱出にあたり幽閉中の政敵護良親王を殺害し、後醍醐天皇の皇子成良親王を同道して東海道を上り三河の矢作宿に逗留しました。兄の尊氏は後醍醐天皇の許可を得ず軍勢を率いて下向したので、尊氏の離反を知った後醍醐天皇は 11 月 19 日新田義貞と脇屋義助（義貞の弟）を出陣させ、11 月 25 日に矢作河原で官軍(南朝方)の新田義貞、脇屋義助の軍と北朝方の足利尊氏、高師泰の軍が戦い、足利軍は官軍に阻止されました。

『梅松論』によれば建武２年（1335 年）鎌倉で反乱を起こした足利尊氏は同年の矢作川合戦では官軍新田義貞の兵を迎え討つ大将高師泰に「まず三河国に下りて矢作川を前にあて、御分国たる間、駈催（かけもよお）して当国の軍勢相待べし、ゆめゆめ川より西へ馬越えべからず」と厳命し、高師直、高師泰が官軍に挑み新田義貞の軍に阻止されたとありますので足利氏にして三河は御分国（ごぶんこく）、即ち第二の故郷だった事が分かります。

３．　高氏の悲劇と総持尼寺

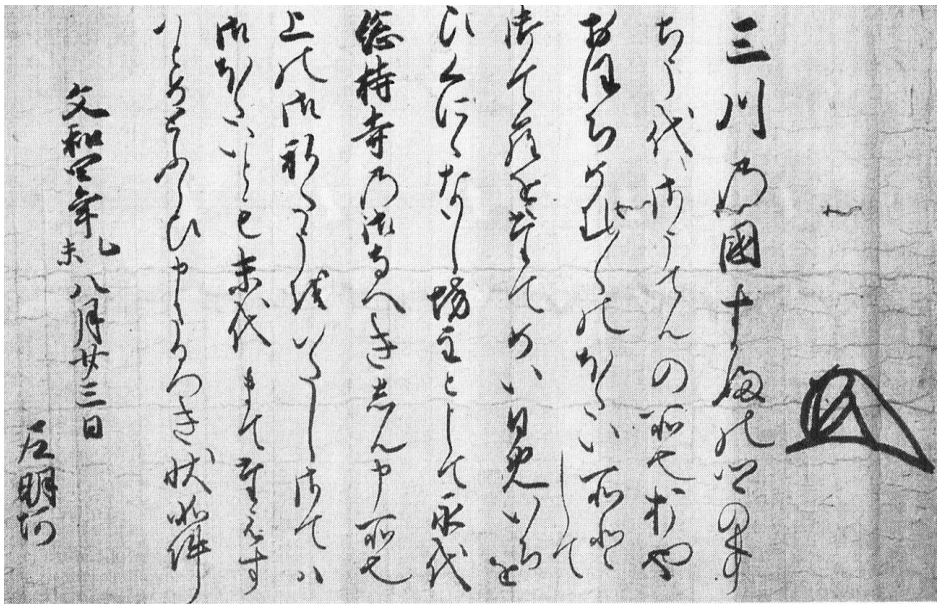
鎌倉時代から南北朝の頃までは高氏が菅生郷、矢作東宿、乙川上流の中山郷、比志賀郷を所領していました。高氏一族の三河守護在任は建武４年（1337 年）から観応２年（1351 年）までですが、高氏は足利家代々の執事であり師直と師泰兄弟が絶大な権力を誇り、守護や幕府の要職に任じられた者が多い一族でした。

足利尊氏は弟直義（ただよし）と最初はうまく二頭政治を実現していましたが、次第に政治路線をめぐって分裂の様相を呈するようになりました。執事高師直と師泰兄弟への直義派の反発が強まり幕府は深刻な内訌へと突き進み、貞和５年（1348 年）直義は兄に迫って師直の執事職を罷免させましたが逆に師直軍に追われ直義は政務から退くこととなりました。

観応元年（1350 年）10 月、直義は尊氏が九州の足利直冬討伐のため出京した隙をついて大和に挙兵し高師兼との対立が鮮明となり、翌観応２年２月優位になった直義軍は摂津打出浜で尊氏軍を破り、この戦いで師直、師泰は負傷しました。執事兄弟の出家を条件に講和が成立しましたが、直義派の上杉能憲（よしのり）が高一族に襲い掛かかり師直、師泰、師兼、師夏、師世、師幸、師景、宗久が殺戮され、高氏は族滅の憂き目にあい、師冬も甲斐で自殺しました。この足利政権の内紛を観応の擾乱（じょうらん）といいます。師泰の娘で師冬の妻である女性は出家し明阿（みょうあ）と名乗り、文和４年（1355 年）鎌倉期から高氏相伝の地である菅生郷に高一族の菩提所として総持尼寺を建立するため、尊氏に菅生郷を総持尼寺へ寄進する様に申し出て許されました。明阿は姪のいち（師世の娘）を出家させ住持としました。

４．　総持尼寺の移転

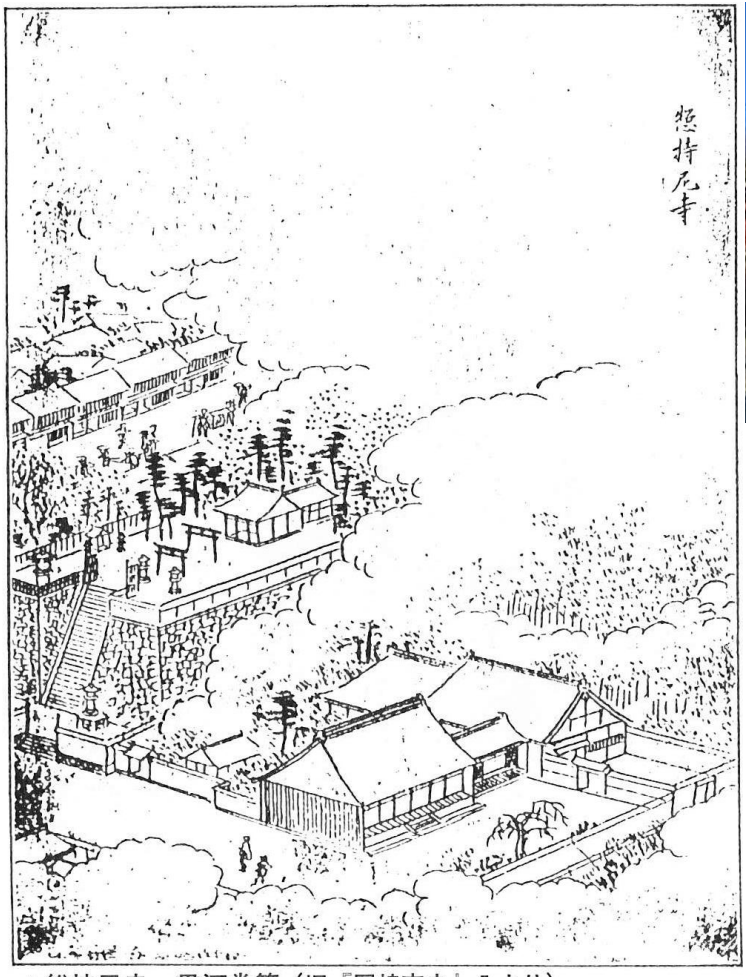
昭和２年（1927 年）まで西岸寺の東側に高氏一族を弔う総持尼寺がありました。康生の郵便局が手狭になり、逓信省から総持尼寺の移転打診がありましたが「勅願寺で由緒ある寺故に勝手に移転はできない。」という理由で寺の住職が明け渡しを拒否し、杉浦銀蔵(岡崎電灯)、千賀千太郎（前岡崎商工会議所会頭）等の有力者も呼応したため、本多敏樹市長、深田三太夫商工会議所会頭が小瀧助役に解決を求め、小瀧助役が中町に移転を進めました。



三河の国すかふ（菅生）の郷の事、ちう（重）代さうてん（相伝）の所也、おやおほち（親祖父）めむくのほたい（菩提）所として、御てらをたて、めいひめ（姪姫）いちをひくに（比丘尼）ゝなし、坊主として、永代総持寺の御寺へきしん（寄進）申所也、上の御祈たう（祷）をいたし、さて八御ほたいとも、末代までたえすつとめとふらひ申さるへき状如件（くだんの如し）　文和四年八月二十三日　尼明阿

足利尊氏袖判尼明阿置文（総持寺蔵）

高師泰の娘で高師冬の妻明阿が一族の菩提を弔うため総持寺を建立し、高氏代々の菅生郷の土地を総持寺に寄進するという内容。袖（右端）に足利尊氏の花押が描かれている。



▲総持尼寺・貫河堂筆（旧『岡崎市史』７より）

中町に移設された現在の総持尼寺

昭和２年まで西岸寺の東隣にあった総持尼寺は創建時より明治８年までは尼寺でした。
現在は総持寺と呼ぶこともあります。

石川貫河堂（いしかわ　かんがどう　1781～1859）は京都で岸駒に学び祐金町に住んでいた絵師でした。俳人の鶴田卓池も貫河堂から絵を習いました。

出典：『岡崎・額田の歴史　上巻』、『岡崎の歴史』、『新編　岡崎市史　中世』、『新編　岡崎市史　20　総集編』

2020.8.3